様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年　6 月　7 日現在

研究種目：基盤研究（C）（一般）
研究期間：2007～2009
課題番号：１９５９２５１５
研究課題名（和文）　助産師に求められる看護実践能力育成に向けた教育方法としての OSCE の有効性の検討
研究課題名（英文）　Examination of effectiveness of OSCE as education method for nursing practice ability promotion requested by midwives

研究代表者
二村　良子（RYOKO NIMURA）
三重県立看護大学看護学部・准教授
研究者番号：３０２４９３５４

研究成果の概要（和文）：助産師に求められる看護の実践能力育成のために、大学教育の助産課程の前後および卒業前および卒業後１年の時点で OSCE（客観的臨床能力試験）を実施し、助産師に求められる看護実践能力育成に向けた教育方法としての OSCE の有効性の検討を行なった。卒業前、卒業後に OSCE を採用することは、看護技術の習得状況題等が明確となり、その後の看護実践能力向上のために必要な課題を明確にする点において有効であった。

研究成果の概要（英文）：OSCE(objective structured clinical examination)was executed for one year about the association production course and before it graduated and after it had graduated of the university education for the practice ability promotion of the nursing requested by midwives, and the effectiveness of OSCE was examination as an education method for the nursing practice ability promotion requested by midwives.
It became clear the acquisition situation title of the nursing technique, and was effective to adopt OSCE after it had graduated before it graduated in the point to clarify a necessary problem for the nursing practice ability improvement afterwards.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	2,300,000	690,000	2,990,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学・
キーワード：助産学、OSCE、看護実践能力、助産師、教育方法

１．研究開始当初の背景

看護において、看護実践能力の低下が指摘され、文部科学省の「看護教育の在り方に関する検討会報告」において、卒業時の看護実践能力の到達目標の設定が行なわれ、報告された。長い看護教育の歴史の中で、独自のさまざまな看護技術演習方法、技術試験などが取り入れられ報告されている。しかし、看護師等の教育システムが現在さまざまな状況であるので、それら技術チェック等において

は共通な評価とは言いがたい。卒業時の看護実践能力について説明責任の遂行が求められている今、医学教育において行なわれている OSCE の考えを取り入れ、看護独自の実践能力を図るシステムの構築が必要である。また、近年の医療安全の確保に向け、特に、周産期領域の医療提供において、母子の安全確保に向けた対策が求められ、新人助産師の臨床能力向上を図るシステムの構築が必要であり、医療安全の確保に向けた対策として新人助産師臨床能力向上推進事業が取り組まれている。

助産課程の実習等で看護技術を十分に習得し、診察及び観察結果より診断等ができるという段階に至るようになるには、実際の妊婦、産婦、新生児への負担が大きいため十分な回数の実施や人数の確保が難しい。学内演習において、できるだけ実地の場面を想定した看護技術実施が求められる。そこで、周産期領域の看護技術習得場面において模擬患者(Standardized Patient:以下 SP と略す)を導入する必要性および SP 養成を今後行なっていく必要があることから、それらの検討についても併せて行なう必要がある。

２．研究の目的

本研究は、大学教育の助産課程における実習前後及び卒業前および卒業後１年の時点で OSCE(Objective Structured Clinical Examination：客観的臨床能力試験）を実施し、助産師に求められる看護実践能力育成に向けた教育方法としての OSCE および SP（模擬患者）に臨床助産師を採用することの有効性についての検討を行なうことを目的とする。

３．研究の方法

(1)OSCE の課題設定と卒業前の OSCE 実施

学士課程助産師教育の卒業時実践能力の到達状況を把握するために OSCE を導入し、その課題を以下の手順で作成し、検討した。

①OSCE 実施可能な項目を「学士課程助産師教育の卒業前における実践能力の到達目標」より抽出した。

②抽出した項目より場面設定し、OSCE 実施の課題を設定した。

③研究同意の得られた臨床助産師３名により OSCE 課題について実施し、その後、研究者８名とともに課題について修正を行なった。

④研究同意の得られた卒業前の学生４名に③で修正した課題について実施し、その内容を撮影した。その後、グループインタビューにより課題の評価を行なった。

(2)卒業後１年の時点での OSCE 実施

①上記で(1)-④で実施した学生を対象に（以下研究参加者と言う)、卒業後１年の時点で同様の内容について再度 OSCE を実施し、実施内容の撮影を行なった。

②OSCE 終了後に研究参加者に OSCE 実施しての振り返りを行なった。

(3)卒業前と卒業後１年において実施した OSCE の撮影内容の比較

①研究参加者に卒業前、卒業後１年後に実施した OSCE について撮影された内容を視聴し、卒業前後において実施内容の相違点について、卒業後、自身の課題についてどのように取り組んだか、OSCE を用いることの意義などについて研究参加者によるグループインタビューを行なった。

(4)OSCE に SP（模擬患者）として参加した臨床助産師の学生のかかわりについての検討

研究同意の得られた臨床経験５年以上の助産師に、母性看護学実習前の学生が「妊婦診察」、「産褥子宮復古の観察」、「乳房観察」の３つの OSCE 課題を実施する際の SP を依頼した。事前に OSCE 場面について助産師に課題を提示し、課題事例についての役割を示し、さらに OSCE におけるフィードバックおよび OSCE 終了後の全体講評への参加を依頼した。すべての母性看護学実習が終了した時点で SP を実施した助産師４名に対してグループインタビューを行なった。インタビュー内容は承諾を得て録音した。得られたデータより助産師が SP として何を考え、実施したか、またどのように学生にかかわったかなどについて述べられた箇所を抽出し、分類しテーマをつけた。

４．研究成果

(1)OSCE の課題設定と卒業前の OSCE 実施

①「学士課程助産師教育の卒業時における実践能力の到達目標」に基づき、卒業までに育成したい実践能力として必要と思われる項目を選定した。OSCE を実施する上で不適切と思われる助産業務に関する項目、医療事故等に関する項目等は除外した。

②課題の作成・修正：抽出した項目の中から、「妊娠末期の妊婦診察」、「分娩第１期の産婦に対する分娩進行状態、母子の健康状態の診断」、「産褥初回歩行時の母体の状態の観察」、「退院時の家族計画指導・避妊方法の指導」、「新生児の胎外適応に関する観察」の５つの場面について事例を作成した。

③臨床助産師により OSCE を実施し、各事例における所要時間は５分から９分であった。また、産褥期の母体の状態の観察において事例提示や場面設定に不備な点が指摘され、修正を行なった。

④終了後のインタビューにより学生は、実習を経験していることから、「OSCE 実施により技術習得状況を実感できた」、「自分が強化していくべき項目が明確になった」、という意見とともに、技術内容に関しては、「実習ほ

ど習得状況の実感がない」、「助産実習前ではイメージし難い内容であるので、具体的にイメージできるようにする」、「さまざまな情報の提示・内容について検討が必要」という意見もあった。

作成した OSCE の課題は、実際の産婦の状況などのイメージができ、必要な技術習得や学習課題の明確化において、助産実習前には有効であった。しかし、助産実習終了後の学生は、実習において実践的な場面を体験しているので、OSCE 課題では、技術習得としての実感が実習に比べると少なく感じるという評価になったものと考える。家族計画指導の場面設定では、妊娠期からの OSCE 課題を経過として考えるため、事例の状況について理解しやすくなっていた。OSCE 課題の設定については、より実践場面に即した内容となるように情報の提示方法や場面設定などの工夫が必要であった。卒業前では、自身が強化していくべき項目の習得や、緊急時の対応や刻一刻と変化する場面への対応など、実習での体験機会が少ないと考えられる課題設定が望まれる。

(2)卒業後１年の時点での OSCE 実施

「分娩第１期の産婦に対する分娩進行状態、母子の健康状態の診断」、「産褥初回歩行時の母体の状態の観察」、「退院時の家族計画指導・避妊方法の指導」、「新生児の胎外適応に関する観察」の４つの場面について、卒業後１年となる時点で同様な内容について再度同じ研究参加者に実施し、その場で、振り返りを行なった。

OSCE を用いることは、卒業前・後における自身の看護実践能力の変化を知ることとなった。OSCE の場面を妊娠期から経過を追いながら実施していくことで、自身の看護実践の取り組みにおいて、この１年間で強化された課題とまだ十分でない課題とが明確になった。したがって、思考過程を踏まえ、助産師として強化したい看護実践能力の向上に OSCE を用いた方法は有効であると考える。特に、妊産褥婦への声かけなど対象に配慮した行動がとれ、状況を判断し、さまざまな情報を統合した行動となっており、自身の成長を実感できたと述べていた。しかし、看護技術を実施していく中で、実践の中で助産師の独自の工夫や方法があり、OSCE の評価項目に含まれない点があったため、さらに評価方法や評価の視点を精査していく必要がある。

(3)卒業前と卒業後１年において実施した OSCE の撮影内容の比較

卒業前と卒業後１年で同じ課題を設定することは、現在と１年前とを比較することであり、自身の成長と課題が明確になるという利点はあるが、卒業前と卒業後１年の OSCE により把握すべき項目が異なり、卒業前では、「基本的技術の習得状況の把握」、「場面に応じたコミュニケーション」などの強化ができる OSCE 課題の設定が必要である。卒業後１年では、同じ課題においてもアセスメント・判断が適切にできており、「自分自身の成長が確認」ができ、特に、「場面に応じたコミュニケーション」や「対象の安全確保の視点」が強化されていた。しかし、卒業後１年では、「基本的技術の曖昧さ」があり、「臨機応変な対応」の強化とともに、基本的看護技術に立ち戻る必要性を感じていた。したがって、卒業前、卒業後１年の OSCE 課題については、同じ課題内容としながらも、評価のポイントをその時期に応じた設定とする必要性について示唆された。

今後は、卒業前・卒業後１年に実施した OSCE の結果をもとに、同じ課題内容であるが、自身の看護実践能力の向上について実感できるよう課題設定とすることが必要である。しかし、時期に応じて看護実践能力として必要な内容が異なることから、時期に応じた評価が行なえるように、評価の内容の検討およびプログラム化が必要である。

(4)OSCE に SP（模擬患者）として参加した臨床助産師の学生のかかわりについての検討

助産師が SP を実施することについて＜教科書どおりの役割実施＞から＜実際の場面や自分の体験からの役割実施＞へと変化していった。その変化となったのには、実習が進むことによる＜学生の成長の実感＞があり、＜学生の看護における成長の期待＞が高まり、＜学生の変化に対する SP(助産師)自身の行動の変化＞となった。SP 実施にあたっては、当初、助産師は、＜SP 取り組みへの戸惑いと自信のなさ＞があり、学生の技術実施を妨げるのではないか、学生の思考を止めることになるのではないかと考え、＜学生への気遣いによる躊躇＞があった。しかし、＜妊産褥婦の反応の気づきへの期待＞となり、腹部触診や乳頭観察時に乳頭圧迫等が強すぎたりした場合、「痛い」と直接言葉に出し、顔をしかめる表情を示すような＜自身の行動の変化＞となっていた。OSCE 実施後のフィードバックに際しては、助産師は、＜指導者の立場からのフィードバック＞から、＜妊産褥婦の立場としてのフィードバック＞、さらに＜看護として伝えたい大切なこと＞に変化していった。学生のケアの場面やフィードバックを通して、＜自分自身のケアの振り返り＞や＜客観的な自己評価の必要性＞などが大切であるということを助産師が考える機会となっていた。

今後、臨床の助産師と協力して OSCE 実施、SP 採用の取り組みは、看護実践能力向上のために、より現実に即した内容としていくこと

で、学生のみならず、助産師に対しても意義があるものと考える。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計０件）

〔学会発表〕（計２件）
①二村良子、永見桂子、﨑山貴代、中山優子、田中利枝、母性看護学での OSCE における臨床助産師の SP としての体験、第 12 回日本母性看護学会学術集会、平成 22 年６月 19 日、三重県津市

②二村良子、大平肇子、永見桂子、﨑山貴代、中山優子、田中利枝、村本淳子、学士課程助産師教育の卒業時における実践能力習得に向けた OSCE 課題作成の検討、第 36 回日本看護研究学会学術集会、平成 22 年８月、岡山市

〔図書〕（計０件）
〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
二村　良子（RYOKO NIMURA）
三重県立看護大学･看護学部看護学科･准教授
研究者番号：３０２４９３５４

(2)研究分担者
村本淳子（JUNKO MURAMOTO）
三重県立看護大学･看護学部看護学科･学長
研究者番号：５０２３９５４７
永見桂子（KEIKO NAGAMI）
三重県立看護大学･看護学部看護学科･教授
研究者番号：１０２１８０２６
大平肇子(MOTOKO OOHIRA)
四日市看護医療大学･看護学部看護学科講師
研究者番号：２０２５９３８６
（平成 19 年度）
中山優子（YUKO NAKAYAMA）
三重県立看護大学・看護学部看護学科・助教
研究者番号：２０４３３２２９
（H20 ～H21 年度：連携研究者）
小村明子（AKIKO OMURA）
三重県立看護大学・看護学部看護学科・助手
研究者番号：８０４５３０８３
（H19 年度）

(3)連携研究者
﨑山貴代（TAKAYO SAKIYAMA）
三重県立看護大学･看護学部看護学科･講師
(H21 年度のみ)
研究者番号：４０３２１２７８
田中利枝（RIE TANAKA）
三重県立看護大学・看護学部看護学科・助手
研究者番号：９０５１５７９３
（H20～H21 年度）